

「国立アイヌ民族博物館PR展」関連講座 (加賀家文書歴史講座)を実施しました。

10月20日(日)「アイヌ語と日本語—加賀伝蔵がみた道東地方のアイヌ語の世界」と題し、国立アイヌ民族博物館設立準備室研究員深澤美香氏からお話をいただきました。参加者は10名です。

はじめに「アイヌ語と日本語」ということで、アイヌ語についての基礎、アイヌ語研究のこれまでの成果についてお話をいただきました。使われていた範囲や日本語との対比、そしてアイヌ語にも方言が認められるなどでした。

後半は、講師が研究の対象としている「加賀家文書」に残されたアイヌ語についてであり、当館所蔵資料を用いて加賀伝蔵がみた道東地方のアイヌ語についてお話をいただきました。資料から読み取れるアイヌ語通辞(通訳)としての力量など加賀伝蔵の資料により根室地方のアイヌ語が明らかになるなどのお話をいただきました。



ふるさと講座歴史系第3回目 擦文・アイヌ文化期の遺跡を巡る ～オンネニクルの森を歩こう～を実施しました。

10月27日(日)参加者20名で実施しました。場所は野付半島の中間部にある「オンネニクル」の森です。

ネイチャーセンターで、オンネニクルの森について説明の後、ナラワラ駐車場付近の番屋まで移動しました。ナラワラを歩き、イドチ岬チャシ跡、野付1.2遺跡を見学し、枯れ木が多い森の中央部で休憩をとりました。天候も良く野付半島特有の綺麗な風景が広がり、程よい距離を歩く運動にもなることから、好評でした。



加賀伝蔵のアイヌ語通辞(通訳)としての能力！

「国立アイヌ民族博物館PR展」関連講座 深澤美香氏の研究から

加賀家は、江戸時代の終わり頃、秋田の八森から代々蝦夷地に渡り場所請負人の下で仕事をしました。そして、当時の根室地方の様子などが記録されている「加賀家文書」を残しました。

中でも加賀家三代目伝蔵は、加賀家文書のほとんどを書き残した人物であり、アイヌ語通辞(通訳)として活躍しました。

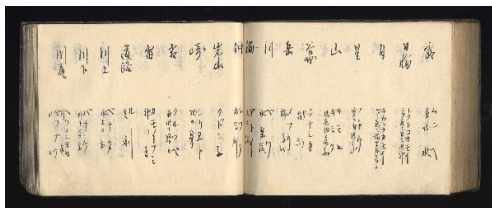
今回の講座の講師深澤美香氏(国立アイヌ民族博物館設立準備室研究員)は、アイヌ語の専門家であり加賀伝蔵が残したアイヌ語資料について研究している第1人者であります。加賀伝蔵のアイヌ語通辞(通訳)としての能力はどのようなものであったかその一部をご紹介します。

加賀伝蔵は、自身の履歴によると釧路地方で働いていた時にメンカクシ、ムンケケというアイヌにアイヌ語を教わったようです。職務の中でアイヌと交わることが多く、蝦夷地で働くには、アイヌ語を覚える必要があると痛感したと思われます。

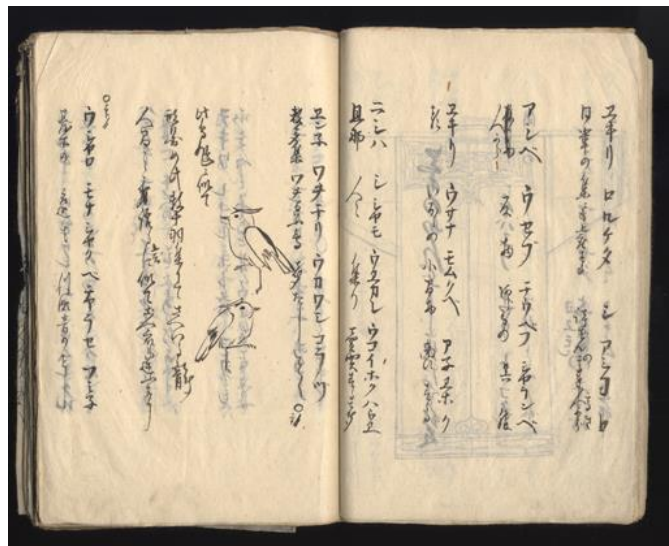
蝦夷地には、松前藩や場所請負人の中にアイヌ語通辞がいます。その中でも松前藩の上原熊次郎は、『藻汐草』(1792)というアイヌ語の辞書を作り世に出しました。加賀伝蔵は『藻汐草』を書き写し、自身の解釈などを付け足し使用していたようです。

さらに、和人の口説(くどき)をアイヌ語に訳しています。口説きは「7音+7音」で読まれるものです。加賀伝蔵がアイヌ語にする時にはカタカナで表記されるのですが、「7音+7音」に合わせて訳しています。和人の口説をアイヌたちにも聞かせるためだったのでしょうか。

深澤氏は道東地方のアイヌ語を研究する上で、加賀伝蔵の資料は貴重であると言われております。



上：『藻汐草(写し)』加賀伝蔵が付け足した部分。



右：『口説菊のかんざしみだれ髪』カタカナは、アイヌ語。

別海町郷土資料館だより No.244

発行日 令和元年11月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802 (FAX 兼)

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記 深澤さんは、学生の頃からアイヌ語研究をはじめ大学院でも加賀伝蔵のアイヌ語資料を研究しました。4月からは、国立アイヌ民族博物館に勤務し、さらなる調査・研究に期待しております。このように自館だけではなく、様々な研究者の力を借りて「加賀家文書」の実態が明らかになってきています。(K.I)